二〇二三年度
地域福祉学科学校推薦型選抜試験問題

小論文問題用紙

［設　問］　次の文章を読んで、

(A)「安心」と「信頼」について、筆者はどのように述べているか、本文中の言葉を用いて一〇〇字以内でまとめ、

(B)「社会的不確実性がある「にもかかわらず」信じる。この逆説を埋めるのが信頼なのです」について、あなたの考えを五〇〇字以内でまとめなさい。

勤務先の大学の女子学生と話していたときのこと。その日は大学でイベントがあり、何人かの学生や教員たちが集まって終了後にみんなで打ち上げをしていました。ところがその女子学生が、九時を回ったあたりでソワソワしはじめたのです。もう帰らなくちゃ、と。門限が一〇時なのだそうです。

やりたい放題やらせてもらっていた自分の学生時代に比べたら、門限が一〇時とはずいぶん真面目だなあ、きっと箱入り娘で大切にされているのだろう、と微笑ましく思っていました。ところがその学生のソワソワぶりがどうも普通ではないのです。聞けばすでに携帯に親から電話がかかってきて、早く帰ってくるように言われた、と言うのです。

なぜ門限一時間前なのに電話がかかってくるのだろう、と訝しがる私の表情を察知して、その女子学生の友達が言いました。

「あ、〇〇ちゃんはＧＰＳで居場所がいつも分かるようになっているんです」

つまり親御さんは、彼女がいま自宅から一時間ほどかかる場所にいることを知っていて、だからそろそろ帰ってこい、と連絡してきたと言うのです。

うーん、それを聞いて私は複雑な気持ちになってしまいました。確かに子供を心配する親御さんの気持ちは痛いほど分かります。心配ゆえに、ＧＰＳで常に子供の居場所を把握できるようにしておきたい。それは間違いなく娘さんを思ってのことでしょう。どのくらい一般的なのかは分かりませんが、子供向けの携帯電話にはＧＰＳを使った見守り機能を搭載したものがあると聞いたことがあります。もしかすると、その女子学生も、幼かったころからの習慣で、ずっとＧＰＳ機能を利用しているのかもしれません。

気になるのは、そこに信頼があるのかどうか、ということです。確かに、居場所が分かることは、親からすれば安心でしょう。しかし子供の成長を思って、自分が感じている不安をぐっと抑えなければいけない瞬間があるはずです。たとえば子供が「一人で電車に乗ってみたい」と言いだしたとき。あるいは「一人で料理をしてみたい」とお手伝いを申し出たとき。つまり子供が「冒険」を望んだときです。そういうときは（あれに気を付けろ、これに気を付けろ、とさんざん注意したあとで）子供を信じて、「やってごらん」と背中を押す。要するに、「可愛い子には旅をさせよ」の心境です。

そこでもし、「やってごらん」と言いながら子供の行動を監視してしまったらどうでしょうか。子供は「自分は信じてもらえていない」「お父さん、お母さんは自分を一人前だと認めていない」と自信を失くしてしまうのではないでしょうか。「信じられている」という気持ちが、子供が安心して新しいことに挑戦するために必要であるならば、不安な気持ちをぐっとこらえて、子供を信じるほうに賭けることも必要なのではないか。私自身はそんなふうに考えてきました。

子育ての方針についてはいろいろな考え方があるでしょう。重要なのは、「信頼」と「安心」がときにはぶつかり合うものである、ということです。「安心」を優先すると、「信頼」が失われてしまう。逆に「安心」を犠牲にしてでも、相手を「信頼」することがある。二つの言葉は似ているように思われますが、実は見方によっては相反するものなのです。

社会心理学が専門の山岸俊男は、「安心」と「信頼」の違いを、「針千本マシン」という架空の機械を使って説明しています。針千本マシンとは、喉に埋め込むタイプの機械で、その人が嘘をついたり約束を

破ったりすると、自動的に千本の針が喉に送り込まれる、という仕組みになっています。

さて、ある人間の喉にこの「針千本マシン」が埋めこまれているとします。そのことを知っている者は誰でも、その人間が絶対に、少なくとも意図的には嘘をついたり約束を破らないと確信できるでしょう。たとえその人間がこれまでに何度も約束を破って、そのために罰として「針千本マシン」を埋め込まれた人間であったとしても、千本の針を喉に送り込まれる目にあうよりは、約束を守ったほうがましだからです。[注1]

「針千本マシン」は、機能としては、孫悟空が頭にはめさせられている輪っか（緊箍児）に似ています。悟空が悪事をはたらくと、三蔵法師が「緊箍児呪」と呪文をとなえる。すると輪っかが悟空の頭を締め付けて苦しめます。つまり、罰が抑止力になって罪を犯すのを防ぐのです。ただ「針千本マシン」のほうは、刑罰の執行が機械化されている点で、より冷徹と言えるかもしれません。

重要なのは、このマシンがあることによって、まわりの人が、この人間は嘘をつかないはずだという確信をもつということです。まわりの人は、その人物の人格の高潔さや、自分たちとの関係を考えてそう思っているのではありません。嘘をつくと彼／彼女は不利益をこうむる。だから、合理的に考えて、彼／彼女は嘘をつかないはずだ。つまり、まさにその人物が「針千本マシン」を埋めこまれているから、彼／彼女は嘘をつかないはずだ、と判断するのです。

果たしてこれは「信頼」でしょうか。それとも「安心」でしょうか。山岸は、ここには「安心」はあるが「信頼」はないと言います。

重要なのは「彼／彼女は嘘をつかないだろう」という判断に、確信が伴うことです。嘘をつくことによって、彼／彼女は確実に不利益をこうむります（もっとも、少ない確率で利益をこうむる可能性もゼロではありませんが、少なくとも山岸は「確信」という言葉を使っています）。まわりの人からすれば、それは確実だから「安心」なのです。想定外のことが起こる可能性がほとんどゼロ。すなわち、「安心」という感情は、状況をコントロールできている想定と関係しています。

他方で、「信頼」が生まれるのは、そこに「社会的不確実性」があるときだ、と山岸は言います。社会的不確実性がある状況とは、「相手が自分の思いとは違う行動をする可能性がある、つまり自分を裏切るかもしれないような状況」のこと。すなわち信頼とは、「相手の行動いかんによっては自分がひどい目にあってしまう状況で、相手がひどいことをしないだろうと期待すること」[注2]なのです。安心と信頼の違いを、山岸は端的に次のように整理しています。

> 信頼は、社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることを意味します。[注3]

要するに、安心とは、「相手のせいで自分がひどい目にあう」可能性を意識しないこと、信頼は「相手のせいで自分がひどい目にあう」可能性を自覚したうえでひどい目にあわない方に賭ける、ということです。もしかしたら、一人で出かけた子供が行き先を間違えて迷子になるかもしれない。途中で気が変わって、渡した電車賃でジュースを買ってしまうかもしれない。そう分かっていてもなお、行っておいでと背中を押すことです。

ポイントは、信頼に含まれる「にもかかわらず」という逆説でしょう。社会的不確実性がある「にもかかわらず」信じる。この逆説を埋めるのが信頼なのです。

注1　山岸俊男『安心社会から信頼社会へ』中公新書、一九九九年、一九二〇頁。
注2　同前、一八頁。
注3　同前、二二頁。

（伊藤亜紗氏『手の倫理』により、一部を改変した）